

2. 消化器内視鏡センターにおける検査・治療実績と今後の展望

消化器科 永原 照也

1. スタッフと診療体制

当院では内視鏡専門の常勤医師9名と内科医師4名、岡山大学、香川大学、診療所などから6名の応援医師で日々の業務をおこなっております。常勤医師の内視鏡学会専門医が4名、指導医が4名の体制で内視鏡学会指導施設となっています。2019年の総件数は12,521件で、内訳を以下の表に示します。検査内容は多岐にわたり、大学などからの応援医師の助力で最新の治療についても施行をしております。オンコールについては、平日夜間、土日、祝日に対応しており、医師、看護師それぞれで待機体制をとっており、必要な時に緊急処置が可能となっています。

2. それぞれの領域における取りくみ

当院の内視鏡検査の特徴としては健診内視鏡が多く、継続して症状のない段階で検査を受けていただくことで疾患の拾い上げに寄与していると思われます。2017年から開始となった三豊観音寺市の健診内視鏡も引き続き行っております。

消化管領域では、食道、胃、大腸の粘膜下層剥離術（ESD）については107例（2019年）を施行しております。

潰瘍性大腸炎やクローン病などの炎症性腸疾患については、中学生以降の小児期から成人期まで幅広い年代の患者に対して治療をおこなっています。近年多くの新規薬剤が上市され治療方法も多岐にわたりますが、当院においても保険適応の内科治療薬からCAP療法、および内視鏡的バルーン拡張術などの処置まで多くの治療方法に対応しています。

胆膵領域では、予後不良な癌である膵癌の早期発見、治療について引き続き取り組みを行っております。早期発見については腫瘍マーカー、MRCPによる胆膵ドックを行い、有所見の方へ精査を勧めることで疾患の拾い上げをおこなっています。胆膵内視鏡による一般的な精査、処置のほか、超音波内視鏡を用いた胆道減圧術などのより専門的な処置についても行うことのできる体制をとっています。

3. 今後の目標

検査自体の安全性と、その前後での患者・職員双方の感染症暴露リスクの低減を主な目標としています。

2020年春頃より問題となっている新型コロナウイルス感染症について当部門でも対策を行っております。密閉・密集・密接という点では内視鏡検査は内視鏡検査室という密閉空間に患者、検査医師など複数の人間が存在し、処置のため接触する機会が多く3つのすべてを満たすものです。従って、急を要しないと思われる検査については延期での対応をとらせて頂いたりして、検査数の調整にご協力をいただいております。

また、密閉・密集・密接の解消のため十分な換気や、検査前後に一度に待機できる患者数の制限、遮蔽物の導入、医療者・患者間の接触を軽減するなどの対策を講じています。大腸内視鏡検査については可能な方は積極的に自宅での前処置薬飲用を御願ひし、病院での滞在時間をなるべく減らすようにしていただいております。

医療者側の防護服については昨年時点で、通常検査でのグローブ、使い捨てガウン、サージカルマスク、ゴーグルの着用を必須としておりますが、症例に応じてより高度のPPE(Personal Protective Equipment)を用いることのできる体制をとっています。

定期的なスタッフミーティングを行いながら、より安全面に配慮し継続して内視鏡診療を行えるように取り組んで参ります。

2019年 内視鏡件数 (1月～12月)			
上部消化管 内視鏡検査	下部消化管 内視鏡検査	胆膵内視鏡検査	合計
9,151	2,628	742	12,521

内訳 EUS関連 378
ERCP関連 354

2019年 治療内視鏡件数 (重複あり)	1,697
上部消化管止血術	93
異物除去	15
胃粘膜下層剥離術	75
食道粘膜下層剥離術	14
胃粘膜切除術	9
食道静脈瘤結紮術	1
食道静脈瘤硬化療法	5
食道ステント留置術	3
食道拡張術	3
十二指腸ステント留置術	7
内視鏡的イレウス管	22
胃瘻造設	44
下部消化管止血術	44
大腸粘膜切除術	319
コールドポリペクトミー	461
大腸粘膜下層剥離術	18
大腸ステント留置術	6
大腸イレウス管	1
hybrid ESD (大腸)	7
軸捻転解除術	7
経口の小腸内視鏡	5
経肛門の小腸内視鏡	4
乳頭切開術	134
乳頭拡張術	30
胆管ステント留置術	169
膵管ドレナージ	26
胆管結石除去	124
超音波内視鏡下穿刺吸引法	48
超音波内視鏡下瘻孔形成術	3